

## 新宗教研究と複数の経路

永岡 崇

一九七〇〜八〇年代に大きく展開した日本の新宗教研究は、自らの拠って立つ新宗教表象の系譜を構成し想像して、新たな「研究史」を語りだした。そこでは、教団・信仰当事者・研究者・文学者などの各々の立場をこえて、戦前期以降、新宗教の発生に関心を寄せ、語ろうとする人びとによって緩やかに構成される共同性がイメージされている。しかしその一方で、戦前の新宗教文化を側面から、あるいは逆方向から構成してきたはずの、新宗教批判文書、異端的信仰者、政府・警察権力などによる語りは除外され、共感に基づいた、あるいは少なくとも悪意のない「研究」の蓄積によって新宗教についての認識が深まっていくという、調和的な「研究史」のイメージが保存されてきたといえる。

こうした「研究史」理解は、宗教の否定的側面をマスコミが、肯定的側面を研究者が対象とするという暗黙の分業体制のもとで、戦後の(新)宗教研究が、共感をもって接近しうる宗教を好んで論じてきた事実と深くつながっていると思われる。オウム真理教事件以降、宗教研究者の間でも宗教がもつ否定的側面により関心を払うべきだという認識は広まりつつあるが、そうした動きに対応して、「研究史」概念にもしかるべき再考・再想像がなされるべきだろう。すなわち、信仰／非信仰、研究／創作、肯定／否定といった差異をこえた新宗教表象の系譜を想定

した上で、戦前におけるさまざまな種類の表象と、戦後における新宗教研究との関係性を考えてみる必要がある。

本報告では、そのひとつの試みとして、天理教の中山みき、大本の出口なおという、戦前・戦後を通じて多くの注目を集めてきた教祖・開祖をめぐる表象の系譜を辿る。とりわけ、従来の「研究史」からは除外されてきた、天理教批判文書、精神病学における宗教研究、天理教から分派することとなった天理研究会の語り、そして特別高等警察の宗教研究といったものを、広義の教祖伝に数えうるものとして取り上げ、戦前における教祖・開祖表象の論理とその変遷を検討しようとするものである。

一九二〇年代までに語られた、天理教や大本における正統的教祖伝や天理教批判文書、精神病学の宗教研究は、教祖・開祖に対する態度の点ではまったく異なるが、彼女たちを一元的に把握することができる存在とする点で、重要な共通点がある。つまり、彼女たちは端的に「宗教的大天才」「正統的教祖伝」「山師」(天理教批判文書)、「宗教性妄想痴呆患者」(精神病学)なのであって、そうした性格づけの外部になにか別の本質を探し求めることはない。これに対して、二〇年代後半以降に現れた天理研究会や特高による語りでは、みきやおの思想を表層し宗教的言説／深層し社会的・政治的意味、といったようにわけてとらえ、後者にこそ本質があるとする論理が現れた。さらに、とくに犯罪心理学や精神病学の影響を受けた特高の言説では、前半生における貧困などの不如意な経験が神がかりの原因とされるとともに、その後の反権力的な思想の形成にもつなが

るものとされる。

このような語りが現れた背景には、天理教における原典(みきの著作)への関心の高まり、国内外の社会的緊張や天皇制神話の浸透を受けた新宗教運動自体の政治的次元への接近、思想警察における精神病学的論理の採用などが考えられるが、表層／深層の二元的理解や民衆としての苦難と思想内容の接続という論理構成のあり方に、戦後の民衆宗教研究や新宗教研究との共通点が見られることが注目される。新宗教研究の論理は、調和的な「研究史」の内部でのみ構成されてきたのではなく、新宗教運動とさまざまな社会的諸力の葛藤や対立のなかで生じてきたものとして、複数の経路を辿るものとして認識されなければならないのである。

## 第十部会

### 曾我量深の象徴世界観

村山 保史

曾我量深は清沢満之門下の真宗学者であり、清沢の仕事を引き継ぎ、神話的な色彩を帯びた仏教語を独自の解釈によって現語に置き換える作業をしている。このような仏教語の翻訳作業のひとつとして、曾我は莊嚴という仏教語を象徴という語に置き換え、仏教の世界を象徴世界として解釈している。発表では、彼の象徴世界観を整合的に読み解く。

曾我は象徴の世界を実体の世界と対比している。実体の世界は理性(理知)によって可能となる世界であり、日常の世界である。ここで問われるのは事物の(固定的・静的な存在様式)である。一方、象徴の世界は具体的な感覚の働きによって可能となる世界であり、ここで問われるのは事物の(応変的・動的な生成様式)である。莊嚴は「飾る」の意味であり、曾我によれば「飾る」は見えないものが見えるように「形取る」ことにより来する。このとき、見えるものは見えないものの象徴となっている。形をもたず見えないものは「純粹感情」とされ、それが「感覚」(内容)となることが見えるように形取ることである。唯識に親しんでいた曾我はこのような感覚の総体を阿頼耶識であるとし、阿頼耶識による象徴の世界が「感応道交」の世